

## 15 中川修亭の「麻薬考」の書誌学的研究

松 木 明 知

華岡青洲の最大の業績は麻沸散の開発であり、それを用いて全身麻酔下の各種手術を施行したことである。麻沸散開発の経緯に関しては、これまで多くの人たちによって研究されてきたが、依然として謎の部分が多い。宗田一はその所蔵する中川修亭の『麻薬考』が青洲の麻沸散開発の歴史を知る上で極めて重要な史料であり、文政九年に刊行された岩田三谷の『外療秘薬考、一名麻薬考』は、中川修亭の『麻薬考』の剽窃本であることを明らかにした。

しかし宗田は『麻薬考』自体に対する十分な検討を行っていない。例えば宗田の所蔵本（以下宗田本）は、呉秀三の『華岡青洲先生及其外科』が思文閣より昭和四十六年に復刻された際、付録として岩田三谷の『外療秘薬考』

と併せて復刻されたが、その中に二十方を記述している。

宗田は右の復刻本の『麻薬考』についての解説の中で、京都大学の富士川文庫中の写本『麻薬考』（以下富士川本）にも言及し、同本は虫食個所が多いとしている。しかし演者が富士川本を實現した所、慶応三年三月二十二日の日付を有する跋に甚だ重要な記述があり、これを宗田は無視している。これによれば養眞森約之が原本を所有していたが、友人石川厚安に貸し出した所、同人宅の火災でこの写本を失った。そのため森の友人の前田安貞が以前書写していた写本の写本を森約之が改めて借りて作つたと記している。つまり富士川本は森の手沢本であることが判明した。巻末には「原本欄外標記図」として原本に付されていた木鼈、蔓陀羅華（風加子）、草鳥、草撥などの図まで明確に示されており、宗田が言うような虫食い、欠字などは余り目立たず、むしろ宗田本より極めて秀れた写本である。もちろん宗田本には図を欠く。宗田が何故、より状態の良い富士川本を復刻に利用せず、その家蔵している写本を復刻に使用したのかは甚だ理解に苦しむ所である。この富士川本には二十方を記載してい

る。さらに演者は今回他に二種の写本を発見した。一本は武田製薬株式会社杏雨書屋の所蔵本『鹿城先生医談』の中に収められている『麻薬考』である。この写本は宗田本、富士川本に見られる寛政八年の中川修亭の序と図を欠いている。そして十五方を記載している。

もう一本は家蔵の写本『麻薬考』で、これはさる古書肆から購入したものである。一枚二十行の罫のある和紙七枚に記されており、書写年代は不明であるが、比較的新しく、幕末頃の写本と考えられる。これには十六方が記述されている。中川の序がついているものの、稚拙な字で書かれており、しかも所々欠字が多く、図を欠いており、決して良い写本ではない。

右に述べた中の三本について、序の末尾を見ると、宗田本では「寛政丙辰中夏中川故識」とあるが、富士川本では「寛政丙辰中夏既望中川故識」とあり「既望」の二字が前者より多い。家蔵の写本では「寛政丙辰中夏既望平安中川故識」とあって、さらに「平安」の二字が加えられている。

以上の四種の写本の書誌学的検討を行った結果、この

中で最も完全に近いと考えられるのは富士川本であり、この系統を引くのが宗田本であると思われる。この系統以外に序を有するものの、十六方しか記載していない家蔵本の系統があり、さらに序を欠き、十五方を記載している武田本の三系統に分類されると考えている。

(弘前大学医学部麻酔科学教室)